

HEPATOLOGY NEWS

肝胆膵病態内科学ニュース

特別号 2010年3月 発行

第23回肝類洞壁細胞研究会学術集会

2009年12月12日(土)・13日(日) ホテル京阪ユニバーサル・タワー

当番世話人より

『第23回肝類洞壁細胞研究会学術集会を開催して』

2009年12月12日～13日の2日間にわたって第23回肝類洞壁細胞研究会学術集会をホテル京阪ユニバーサルタワー（大阪市此花区島屋）で開催いたしました。大阪市の真中での開催も考えたのですが、真夜中まで議論する活発な会を意識していましたので、融通を聞いてくれたホテル京阪には感謝しています。有料参加者が93名、医局員も合わせると122名の参加があり、非常に賑やかな会にできたことを光栄に思っております。本研究会は肝類洞の解剖学、生理学、免疫学、細胞生物学、生化学等を網羅的に勉強する歴史ある研究会であり、谷川久一先生の先見の明で開始され、23年間継続して行われてきました。この研究会の特徴の一つは基礎・臨床を問わず本分野に興味ある研究者が集い、意見交換し、時には激しく議論して、夜は懇親を深めるといったスタイルを貫いてきたところです。私は私自身がこの研究会に育てていただいたとの思いが強く、異分野交流ができる臨床としては希有な研究会であると思っています。本年度の学術集会には40演題もの応募を頂戴しまして活発な研究会にすることができました。演題をテーマごとに分類し肝類洞構成細胞に関するアップデートな報告をしていただきながら、若手研究者を刺激するために「School of Sinusoidal Research」と称する企画を用意しました。特に夜のセッションは終了したのが真夜中1時近くになっており、お酒が入っていたのと、準備で多少疲れていたのが

重なってその時間帯のことはよく覚えていません。が、最後まで熱心に議論に参加していただいた先生、また、質問攻めに耐えた若手の研究者に敬意を表します。特別講演は「人工的に細胞を創る」活動をされている大阪大学大学院情報科学研究科教授 四方哲也先生と「ヒトの肝細胞を持つマウス」を作出された広島大学名誉教授、大阪市立大学客員教授 吉里勝利先生にお願いし、私達が日頃の診療や研究では味わえない分野のお話をじっくり聞く事ができました。懇親会は、研究会会場隣のユニバーサルスタジオJapan内のパーティー会場を借りて行いました。クリスマスシーズン、華やかな雰囲気で大満足・・・といきたかったのですが、正直なところ会場のスタッフの対応が悪くて爆発寸前のところまでいきました。なんとか、耐えに耐え、我慢に我慢の末に進行し、ダンスコンテストで久留米大学の上野先生、理化学研究所の小嶋先生の踊りを見てようやく安堵の気持ちが沸き上がってきたことを記憶しています。

Contents

当番世話人より	1
事務局長より	2
医局員より	3
発表者の声	4
Photo Gallery	6
編集後記	12

何れにしても貴重な経験をさせていただきまし
たし、研究の楽しさを再認識いたしました。また、医局全体で取り組んだ、対学外的に初
めでの企画でしたので成功裏に終えたことは今
後の自信に繋がります。若手が知的好奇心を持ち
ながら日々研鑽できる教室作りを目標として行き
たいと思っております。

末筆になりましたが、本研究会を開催する
にあたり、多くの方々から貴重なご支援を
頂戴しました事を心より御礼申し上げます。ま
た、事務局長を担当していただいた坂口浩樹先
生、日々の無理難題を聞き解決してくれた秘書高
野さん、そして週末にも関わらず研究会の進行に
協力してくれた医局員、研究員、スタッフ全員に
感謝いたします。

(河田 則文)

// 事務局長より

『第 23 回肝類洞壁細胞研究会学術集会を終えて』

第23 回肝類洞壁細胞研究会学術集会の準備
を河田教授に仰せつかってから、とりあえ
ず寄付金を集める役に徹しました。研究会の運営
方法は河田教授がご自身で考えられ、また実質上
の事務は教授秘書の高野さんが担当してくれま
した。ということで寄付金を集めるだけなので大
丈夫だろうということであんまり安心していたのですが、
実際には昨今の不景気の影響からメーカーから
の寄付も思うように集まらず、研究会の開催直前
まで寄付金集めに追われました。ある程度集まっ
たので、どうなることかと思いつつひやひやし
ていたのですが、後日の決算で何とか赤字を出さ
ずにすんで、現在はほっとしているところです。
この研究会は最近演題数と参加者が減ってきて
おり、少しさびしい状況になってきたとの事で
すが、今回は新進気鋭の河田教授が開催される
ということで 40 題の演題が集まり、また参加者も
100 名を超える盛況でした。きっと河田教授が熱
心に演題を集められた成果だろうと思っていま
す。会場では専門家たちの熱い討論が繰り広げら
れ、制限時間内におさまらず、質問コーナーを一
部禁止しなければならぬほどの状況でした。ま
た、河田則文教授のアイデアで懇親会は USJ 内

の会場で行われ、ショーを観ながら食事をする
という斬新な企画でした。谷川久一先生がサント
の衣装で開会の挨拶をされ、一同びっくりしてい
ました。会場ではペインティングコーナーも開設さ
れており、家族で来られた参加者の子供たちに人
気でした。研究室の小川君も顔に猫のペインティ
ングをされ、大うけしていました。また、ステー
ジ上でダンスコンテストも開催され、久留米大学
の上野先生が栄えある優勝を勝ち取りました。上
野先生の意外な一面を垣間見てしまいました。こ
のような非常に盛り上がった懇親会のあと、研究
会会場に戻り、夜 10 時から 12 時半まで「School
of Sinusoidal Research - 若手研究者の集い -」が
開催され、再び白熱した議論が展開されました。
写真係をしていた私は思わず寝てしまい、河田教
授から退場を命じられるという苦い経験をして
しまいました。翌日は 7 時半から世話人会、8 時
半からモーニングレクチャーというハードスケ
ジュールでしたが、医局員一同の努力で何とか成
功裡に研究会を終了する事ができました。谷川久
一先生からは大阪らしい研究会でよかったとい
うお褒めの言葉をいただき、一安心しました。

(坂口 浩樹)

// 医局員より

『第23回肝類洞壁細胞研究会学術集会に参加して』

平 成21年12月12日・13日にホテル京阪ユニバーサルタワーで第23回肝類洞壁細胞研究会学術集会が開催されました。今回は、河田教授が当番世話人をされるということで、私たち医局員も微力ながらお手伝いをさせていただくことになりました。

私 の担当は、2日目のアナウンス係り。早朝からのセッションでしたので、とにかく眠い！という状態からのスタートです。会場の一番前で寝てしまったら格好悪いなあ、と、思いながら始まりましたが、さすがに私も大学院で肝星細胞の研究をかじっていたはしくれ。そういえばあんなことをしていたなあ、そんなことってなあ、と自分でも驚くくらい、引き込まれていきました。大学院時代に一緒に研究していた先生や教えていただいた先生方のお顔も拝見でき、とても懐かしい気持ちになりました。院を卒業し、基礎研究から離れて〇年経ちましたが、私自身にとって、とてもよい刺激となりました。

さ て、この研究会の懇親会は、1日目の夜に、ユニバーサルスタジオジャパン(USJ)内

開かれました。スーツ姿の先生方が、ぞろぞろとUSJに入っていられる光景は、ちょっと目を見張るものがありました。お手伝いに来てくれたM5の学生さんと一緒に入っていくと、そこはまさに別世界。美しいクリスマスイルミネーションに一瞬言葉を失い、うっとりしてしまいました。USJのキャラクター、ウッドベッカー（青い服を着た赤い鳥）に迎えられ、会場内にはサンタクロースもいて、、、。思いがけず、クリスマス気分を満喫させていただきました。参加された先生方や学生さんも大喜びで、こんな盛り上がった懇親会ははじめてではないでしょうか。

河 田教授、および、事務局をされた坂口先生、高野さんは本当に大変だったと思いますが、お疲れ様でした。私自身は、ほとんどお手伝いもできず、楽しませていただいただけで終わってしまいましたが、いろいろな意味で、本当によい研究会だったと思います。参加させていただき、ありがとうございました。

(小林 佐和子)

『第23回肝類洞壁細胞研究会学術集会に参加して』

第 23回肝類洞壁細胞研究会学術集会は、平成21年12月12日から13日まで、大阪のホテル京阪ユニバーサルタワーで開催されました。今回は河田教授が当番世話人をされていたこともあり、私はお手伝いで参加しました。

私 にとって特筆すべきはやはり、午後10時から深夜0時30分までの予定で行われたSchool of Sinusoidal Research -若手研究者の集い-だったと思います。若手の研究者が30分程度の持ち時間でしゃべり、厳しい質問を受ける。自分も研究をしていますので、先生方のご苦勞が少しは分かります（と言えるほど研究できていま

せんが)。若手の先生の研究ぶりもさることながら、コメンテーターの先生方の熱い言葉がとても印象的でした。ここまで打ち込めるものがあるのは、幸せなことだと思います。結局、この熱気ムンムンの会は深夜1時頃まで続きました。翌13日の発表も予定通り午前8時30分から行われ、終わる頃にはもう、頭の中は類洞壁細胞一色！。本研究会は、私にとって非常に大きな刺激になりました。今年は基礎で1本論文を書けるよう精進する所存です。

(藤井 英樹)

『第 23 回肝類洞壁細胞研究会学術集会に参加して』

平 成 21 年 12 月 12 日と 13 日に第 23 回肝類洞壁細胞研究会学術集会がホテル京阪ユニバーサルタウンで開催されました。その中で私は 13 日のアナウンスのお手伝いで参加させて頂きました。アナウンス席は座長の後ろに席があり、発表ではないのに緊張感がありました。

前 日は夜遅くまで若手研究者の集いが行われていたにもかかわらず、翌朝のモーニングレクチャーからたくさんの方が参加されていました。私自身この研究会に参加するのは初めてで

したが、実際会場にいて基礎・臨床に問わずいろいろな分野の先生・研究者の方が発表されている会という印象を受けました。

発 表内容は基礎の専門性の高い分野が多く、なかなか理解不十分なところはありませんが最近話題になっている NASH、肝線維化や肝臓ガンにおいて、肝類洞壁細胞が重要な役割を持っているという事に関して少し理解できたかなと思います。

(黒岡 浩子)

// 発表者の声

『大阪らしい研究会を・・・』

昨 年の 12 月、河田教授が当番世話人の第 23 回肝類洞壁細胞研究会学術集会が大阪で開かれました。私は学生の頃から星細胞や線維化を研究テーマとしていたため、これまで頻りに本研究会に参加していました。この研究会は大きな学会と違って小規模ではありますが、基礎も臨床も含めた非常に密の濃い研究会です。そして、私にとっては同じ分野の研究者との出会いの場でもあり、議論することで非常に刺激される研究会です。今回の研究会は一般講演に加えて若手研究者を刺激する(?) 目的で、若手研究者による一般講演が夜の 10 時から 12 時過ぎまであり活発な議論が行なわれました。そして、懇親会はユニバーサルスタジオ内で開かれ、歌やダンスもあり非常にハイテンションな楽しい会になりました。このような研究会はいままで経験したこと

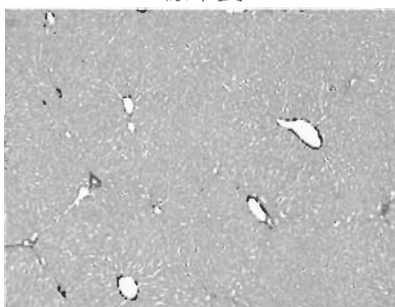
がなく、河田教授らしい斬新なアイデアを含めた研究会だったと思います。これを機に、若いドクターには類洞壁細胞や線維化に興味を持ってもらい研究会への参加と基礎研究に興味を持ってもらいたいと思います。

最 後に、今回、私はウサギを使った NASH 肝硬変モデルを作製し、その分子機構について星細胞の役割を中心に発表を行いました(下図)。このモデルは高脂肪・高コレステロール食のみ長期間与えることで NASH から NASH 肝硬変へと進展し、NASH の分子機構を調べるのに有効な動物モデルです。ウサギはヒトと脂質代謝が非常に類似しており、今後このモデルを使って薬剤による NASH の治療効果を調べていきたいと思っています。

(ポストドク研究員 小川 智弘)

〈シリウスレッド染色(線維染色)〉

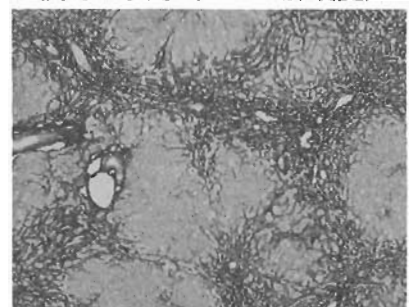
標準食



投与 2 ヶ月 (NASH)

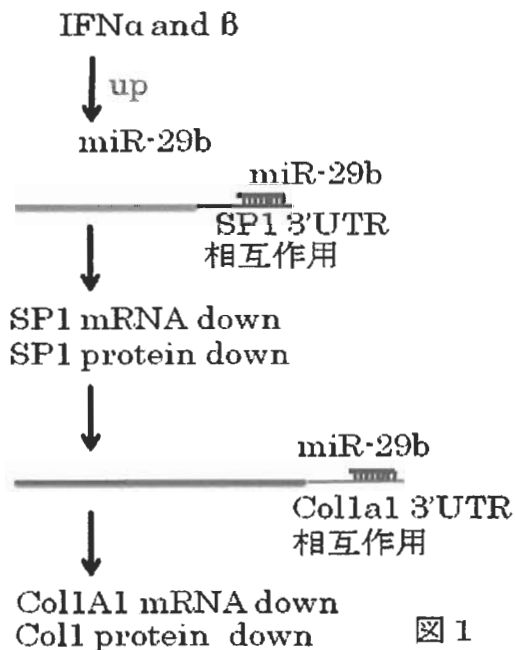


投与 9 ヶ月 (NASH 肝硬変)



『第 23 回肝類洞壁細胞研究会学術集会を振り返って』

第 23 回肝類洞壁細胞研究会学術集会 – 若手研究者の集い – School of Sinusoidal Research において、「星細胞のコラーゲン発現に関与するマイクロ RNA とその機能」の演題で、発表を行った。発表内容の概要は以下の通りである。培養星細胞株の培地中にインターフェロンを添加すると、miR-29b の発現が促進される。miR-29b は、1 型コラーゲン $\alpha 1$ 鎖および 1 型コラーゲンの転写調節因子である Sp1 の mRNA と結合し、それら mRNA の翻訳を抑制あるいは mRNA 分解を促進し、結果として 1 型コラーゲンの発現を抑制する (図 1)。



若手研究者の集い – の発表時間枠は、懇親会後の午後 10 時より行われた。私自身の発表は、その中でも 1 番最後であったため、発表が終了した時、午前 12 時半を過ぎていた。発表前の懇親会において、私の研究発表のコメントーターを担当して頂いた先生と同じテーブルに同席する事になり、とても萎縮してしまった。その事もあり、発表開始時には、予想に反し緊張してしまった。発表が進行していくにつれ徐々に緊張は解けていった。今回のように深夜に研究発表する機会は珍しく、初めての経験であった。また、今後このような夜中に研究発表をする機会には、そうそう出くわす事はないと思う。今回のような機会を得た事は、非常に貴重な経験となると思う。深夜の発表にも関わらず数多くの先生方に発表を聞いて頂いた。発表の時間も、規格外で質疑応答を含め 30 分間と、とてもふんだんに時間を取って頂いた。質疑応答においては、今後の展望を含め、諸先生方と有意義なディスカッションをする事ができたと思う。また、他の若手研究者の発表においては、質の高い研究が多く、そこから刺激を受ける事もできた。

(ポスドク研究員 飯塚 昌司)

Photo Gallery (1)



Photo Gallery (2)



Photo Gallery (3)



Photo Gallery (4)



Photo Gallery (5)



Photo Gallery (6)



Photo Gallery (7)



※今回のPhoto Galleryの写真はすべて学術集会、懇親会で撮影したものです。

編集後記

本研究会を開催するにあたり、多数の賛助団体より本研究会の趣旨にご賛同を賜り、多大なご援助をいただきました。また、研究会当日は多数のご参加、ご協力をいただき、心より御礼申し上げます。研究会の無事の終了を報告させていただくことができ、嬉しく思っております。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

(教授秘書 高野 由利子)

HEPATOLOGY NEWS

肝胆膵病態内科学ニューズ

特別号 2010年3月 発行



発行者 / 大阪市立大学大学院医学研究科
肝胆膵病態内科学

〒545-8585 大阪市阿倍野区旭町 1-4-3

TEL : 06-6645-3811 FAX : 06-6645-3813

編集委員 / 森川浩安